（ 続紙 1）

| 京都大学 | 博士（地域研究） | 氏名 | 蛯原　一平 |
|---|---|---|---|
| 論文題目 | 琉球列島におけるイノシシ猟の歴史的展開と生態的基盤 | | |

（論文内容の要旨）

本論文は生態環境および社会文化の面で東南アジア島嶼部と強い関連性を有する、琉球列島の西表島において、リュウキュウイノシシ（以下、イノシシ）の狩猟を対象とし、その歴史的変遷、現在における実践の具体的記載、狩猟がイノシシの個体群に及ぼす影響を論じ、狩猟が持続的に行われるための条件を考察したうえで、東南アジア島嶼部で行われた先行研究との比較をとおして陸生哺乳類の持続的狩猟と個体群管理を行なっていく際の新たな分析枠を論考する。

第 1 章ではイノシシ属動物の野生動物資源としての有用性と東南アジア島嶼部をはじめとする分布域各所での、狩猟圧の増大や生息環境の悪化による当該動物の厳しい生息状況を指摘する。そのうえで、現在でも多数の猟師がイノシシを罠猟で狩猟している西表島で研究を行う意義を述べ、本研究を行ううえでの視点と目的を提示する。

第 2 章では、多数の考古・歴史資料をもとに、先史時代から近代以前における琉球列島でのイノシシ猟を記述する。また、聞きとりと現地調査から、近代において使用された罠の復元を行うと同時に、狩猟と農業の複合形態を具体的に明らかにする。さらに、罠猟が主流となる西表島の、現在までの狩猟の歴史的変遷を記述することに加えて、従来から行われてきた狩猟と現行の狩猟制度との関連を論じる。

第 3 章では、ひとりの猟師が、11 年間、自ら作成した狩猟記録図に基づき、捕獲結果の経年変化、罠掛けや出猟スケジュール等の狩猟実践を分析する。猟師がイノシシの予測困難な行動やその年の罠を掛ける場所の状況に応じて狩猟実践を調整しつつ、イノシシの生態や猟場の環境等に関する知識を深め、捕獲数増加を目指す一方において、新たな罠をほとんど追加しないといった捕獲努力量を抑制する行為も認められることを記述する。

第 4 章では、罠を掛ける場所を聞きとりと現地踏査によって全て記録し、猟師は猟場へのアクセスポイントから遠方には罠を掛けないことを明らかにする。さらにこれらの経年変化を示すとともに、罠掛けと見廻りを行う人の単位（組）があることを述べる。組の間にはテリトリー制が存在し、各組はその制度のなかで、年によって生じる自然環境の変化に応じて狩猟を実践していることを明示する。

第 5 章では、狩猟がイノシシの個体群に及ぼす影響を明らかにするため、胎児の発育段階と卵巣の観察をとおして交尾期や妊娠率を推定することに加えて、下顎の歯に基づく齢査定から、今日におけるイノシシの個体群動態を把握する。さらに、罠効率を指標とした個体数密度や総捕獲数を 30 年前の先行研究と比較して､捕獲圧に大きな差異がない可能性を示すとともに、若齢個体の捕獲率の減少、および罠効率の不安定

性を実証的に解明する。

第 6 章では、これまでの章で明らかにした研究結果をもとに総合考察を行う。捕獲数増加を目指す一方で必要以上の猟果を望まず、限られた罠本数と狭い猟場面積で罠猟を行うといった狩猟実践の特徴に起因する狩猟効率の不安定性と、島中心部に形成される広大な狩猟空白域は、現在においても西表島で狩猟が継続して行われている要因であると考察する。そしてイノシシ肉が、一部では商品化されているものの、今なお、そのほとんどが住民の連係を保つための食物として共食・無償贈与されるという西表島社会の狩猟実践の背景に注目する。つづいて、西表島における持続的狩猟を継続するために必要な事項を具体的に提言することに加えて、東南アジア各地の事例と比較考察をし、陸生哺乳類の持続的狩猟と個体群管理を行っていく際には、前述の提言の応用とともに、市場経済化に伴う商品的価値だけで野生動物資源を計るのみではなく、狩猟を行う社会の特徴と当該動物の文化的価値を含めた分析枠から議論することが必要であると結論づける。

第 7 章では、今までの章を要約して結論とする。

（続紙　２）

（論文審査の結果の要旨）

陸生哺乳類の多くは生息域が人間の生活圏と近く、古来より人間の諸活動によって個体数や生息環境への影響を受けてきた。近年では狩猟圧の増大や自然環境の悪化による個体数の減少が著しい種類も多い。一方において、農林業の経営形態や土地利用の変化により、これらが害獣化し、人間社会への影響が深刻化する事態も生じている。陸生哺乳類に関わる諸処の問題は単に生物多様性の維持といった点にとどまらず、それを取り巻く人間社会の在り方に関連した今日的課題である。

イノシシ属動物はユーラシア大陸、東南・東アジア島嶼部等に生息し、良好な肉質を持ち、高い資源的価値を有しているために狩猟の対象や家畜化など、様々な形で人間と関わりを持つ一方で、多くの地域で個体数の減少や害獣化が顕著に認められ、人間社会との共存が重要な課題となっている。

本論文はこのような問題意識に基づき、生態環境および社会文化の面で東南アジア島嶼部と強い関連性を有する、琉球列島の西表島において行われているリュウキュウイノシシ（以下、イノシシ）の狩猟実践を、長期間のフィールドワークと多数の考古資料・歴史資料から得られた情報を駆使して多角的に明らかにした優れた研究成果である。

本論文の学術的貢献は以下の諸点である。

第一に、琉球列島におけるイノシシ猟を、近代に使用された罠の復元、狩猟・農業複合形態の具体的な解明などともに、西表島で罠猟が主流となる狩猟の変遷を含めて歴史的に明らかにし、従来から行われてきた狩猟と現行の狩猟制度との関連を論考した。これにより、西表島における罠猟の歴史的背景を理解することが可能となった。

第二に、猟師の狩猟行為を詳細に分析し、猟果の増加を目指す一方において、限られた猟場面積と罠本数で狩猟を行う抑制的行為も認められるという西表島の狩猟実践の特徴を正確に捕捉した。この内容は狩猟文化を考察する際に大きな課題を提供するものとして価値を認める。

第三に、西表島全体における猟場の分布とそれらの経年変化から、罠掛けと見廻りを行う人の単位（組）の間にはテリトリー制が存在し、各組はその制度のなかで狩猟を実践し、猟場へのアクセスポイントから遠方には罠を掛けないため、島の中心部には広大な狩猟空白域が存在するということを明確に示した。この成果は狩猟制度や生物の個体群管理を考察する際に多大な貢献をなすものとして評価できる。

第四に、今日におけるイノシシの個体群動態を把握することに加えて、罠効率を指標として個体数密度や総捕獲数を 30 年前の先行研究と比較し、この間に捕獲圧に大きな変化がなかったこと示唆するとともに、若齢個体の捕獲率の減少、および罠効率の不安定性を実証的に解明した。これらの結果は狩猟を持続的に行うために必要な生態的基盤の情報として価値あるものと認める。

第五に、これまで明らかにした研究結果をもとに総合考察を行い、一定の範囲内で捕獲数増加を目指すものの、狭い猟場面積で限られた本数の罠のみを用いて狩猟を行

ったり、島中心部に広大な狩猟空白域を残すといった猟師の狩猟実践によって、猟場内での短期的な狩猟効率は不安定であるものの、長期的には、持続的狩猟が可能になっているとした。また、西表島では今なお、イノシシ肉が商品価値をもちつつも、住民の儀礼時の食物、あるいは社会関係を円滑化する食物として共食・無償贈与されるという、文化的、社会的背景がこの地域の狩猟実践を支えていることを指摘した。さらに、これらの成果に基づいて、西表島における持続的狩猟を継続するために必要な事項を具体的に提言するとともに、この例を東南アジア各地の事例と比較考察をし、陸生哺乳類の持続的狩猟と個体群管理を行っていく際には、対象動物の生態や狩猟活動といった生態的特徴や、市場経済化に伴う商品的価値だけで野生動物資源を計るだけでなく、狩猟を行う社会の特徴と当該動物の文化的価値を含めた分析枠から議論することが必要であると結論づけた。

本研究は西表島の事例研究にとどまらず、特に東南アジア島嶼部における地域研究に資することに加えて、生態学、保全生物学、人類学など、様々な学問分野に貢献するものであり、文理融合の研究成果として高く評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成 22 年 1 月 19 日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。